40億年、いのちの旅 (3)

種の絶滅は進化の過程で自然に起きることでもありますが、①現在進んでいる種の絶滅は、これとは異なって、生息地の破壊や環境の悪化、過剰な捕獲や採取、森林の伐採、外来生物の持ちこみによる生態系のかく乱など、私たちヒトの活動をおもな原因としています。

過去の大量絶滅においては、絶滅に向かう期間が少なくとも一〇〇万年以上の長期にわたって起こったものですが、現在、地球では世界で毎年四万種の生物が絶滅しているといわれており、過去五億年間の平均的なペースの何百倍、何千倍ものはやさで、生物たちが姿を消しているといわれています。

環境省が作成した絶滅のおそれのある種のリスト（レッドリスト）によると、日本に生息する哺乳類の約二三％、鳥類の約一三％、爬虫類の約一九％、両生類の約二二％、汽水・淡水魚類の約二五％、維管束植物の約二〇％が絶滅のおそれのある種とされています。これらには、タガメ、メダカ、エビネ、キキョウ、サクラソウなど、かつては私たちのまわりで普通にみられた動物や植物もふくまれています。

ほかの生きものたちが絶滅してしまってヒトだけが生きのびられる世界などありえませんし、ましてや、物質的に豊かで安全な生活などもありえません。

②生きものたちには一つ一つに個性があり、すべてが直接に、間接に支えあって生きています。そのなかの一つの生物種が欠けたことによって、その影響が生態系のシステム全体におよぶ可能性もあります。食物連鎖の下位のものの絶滅により、上位の生きものが影響を受け、生態系が変化することはしばしば指摘されています。

（中略）

くりかえしになりますが、生きものは、生活場所や食べ物などをほかの生きものと違うものにすることにより競争をさけ、それぞれの生活環境に適合するように分化してきました。そして、③このことが多様性を生み出す結果になってきたのです。さらに、それぞれの生きものはたがいに有機的にからみあい、影響をおよぼしあいながら地球の生態系を形づくっています。

四〇億年にわたる「いのち」の旅をいまに伝える、生きものたちの多様性。それをこれからも引きついでいくのは、現在、生きものの頂点にいる私たちの責務です。しかし、これからもこのままほかの生きものたちを圧迫し続けてしまったら、地球環境はさらに悪化し、ヒトは自ら絶滅する危機をまねいてしまうかもしれません。

歴史に目を向け、それが鳴らす警鐘に耳をかたむけ、ヒトが長い歴史のなかで得てきた文化や科学をほかの生きものと共存するために使うことが求められています。

ホモ・サピエンスとは、ラテン語で「知恵のある人」という意味です。その名にふさわしく、私たちは知恵を出しあって、自滅の道を歩まないようにしたいものです。

（伊藤明夫『40億年、いのちの旅』岩波書店　第6章による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「現在進んでいる種の絶滅」の特色として述べられているものを二つ選びなさい。

ア 種が進化する過程で絶滅が起こっている。
イ ヒトの活動が原因で絶滅が起こっている。
ウ ある種が絶滅に向かう期間は一〇〇万年以上にわたる。
エ 過去の絶滅にないはやさで種の絶滅が進んでいる。

［　・　］

(2) ——線②「生きものたちには……生きています」とあるが、ここからどのようなことが言えるか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア ある種が絶滅したとしても、生態系の中に絶滅した種の代わりの役割をはたす生物が存在するはずだということ。
イ 生態系の中でより食物連鎖の上位の生物のほうが、食物連鎖の下位の生物よりも絶滅の可能性が低いということ。
ウ 一つの種の絶滅は、他の種の生存にも関係することであり、生態系全体に影響をおよぼす可能性があるということ。

［　］

(3) ——線③「このこと」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア それぞれの種が、他の種と異なるあり方で環境に適応し、分化してきたこと。
イ それぞれの種が、有機的にからみあい、豊かな生態系を形づくっていること。
ウ それぞれの種が、これまでの生物の歴史の中で生まれた多様性を示していること。

［　］